

# Cutting-Edge

[カティング・エッジ]

**Move** この人にきく



## 文化が作りだす身体性

### — ジェンダーとセクシュアリティ —

最近、新聞などで「ジェンダー」という言葉をめぐって議論がなされている。発端は、男女平等を表す用語として「ジェンダー・フリー」という言葉が使われたことであった。ところが、これに対して、ジェンダー・フリーを男女の区分をすべて取り去るものとして、いきすぎだという批判が起き、学校の体育授業のための着替えを男女が同じ部屋にする例があげられた。

私は、「ジェンダー・フリー」という言葉は、わかりにくいので使わないが、すでに指摘されているように、男女同室での着替えと、ジェンダー・フリーとは何の関係もないと思う。しかし、この例は、ジェンダーをめぐって起きやすい誤解や混同を物語っている。

社会常識は、身体に関わる差異を、常に男女の二項対立でみようとする。しかし、そこに落とし穴がある。男女同室での着替えの例は、一見、男女が同じ部屋で着替えるか、別の部屋で着替えるかという、性別による区分の問題のように見えるが、実はそうではない。たとえ男女であっても、夫婦や、母親と幼い男子であれば、同じ部屋で着替えて自然だろう。逆に、たとえ同性同士でも、同性愛の人と異性愛の人（たとえばレズビアンとストレート）が、同室で着替えるのは、お互いに気恥ずかしいであろう。思春期の男女が同じ部屋で着替えるのが問題となるのは、たんに男女だからではなく、そこに、身体をセクシュアルな視線でとらえる眼差しが生まれるからである。これは、性別（そこには権力も含まれる）の関係であるジェンダーの問題ではなく、性的欲望や快楽の関係性であるセクシュアリティの問題である。男女の区分けをするかどうかではなく、男女を問わず、その場で、性的な欲望の対象とする／されるという関係が生ずるかどうか、そういう視線でみられるかどうかが、問題なのである。

混浴も同じである。混浴は、それをおこなう人々の間で文化として根付き、そこでは誰も身体をセクシュアルな視線でとらえないという相互信頼を確立しているならば、特に問題にはならない。しかし、そうした信頼がなければ、とりわけセクシュアルな視線で見られる対象となりやすい女性にとっては、それは不愉快なものとなる。異性の前で裸体になることが、性的な関係、欲望と結びついている文化的な文脈では、望まないのに、そのような状況に立たされることは、セクシュアル・ハラスメントであり、意志に反して性的欲望の対象や主体とされるという意味で、性愛に関する自己決定権の侵害となってしまう。

男女同室での着替えも、セクシュアルな視線が生じる状態で、個人に強制されるなら、それはセクシュアル・ハラスメントであり、男女平等ではないどころか、性差別である。ジェンダーは、セクシュアリティを抜きに考えることはできない。しかし、同時に、性的欲望と快楽は、必ずしも異性愛に限らないように、性別とは別の軸の問題である。

ジュディス・バトラーは、近代社会が、ジェンダーと異性愛を基礎として構成されているとして、その問題点を指摘しているが、性別をめぐるジェンダーと性的欲望をめぐるセクシュアリティという二つの関係を理解しつつ論じていくことが、今後ジェンダーをめぐる理論において、ますます重要となっていくであろう。



お茶の水女子大学教授  
**坂本 佳鶴恵**  
(さかもと かづえ)

### CONTENTS

Move この人にきく	1P
Books ジェンダー最・前・線	2, 3P
Information	4P

### 未来・ことば

それはながら間  
私たち女のまえに  
いつも置かれてあつたもの、

自分の力にかなう  
ほどよい大きさの鍋や  
お米がぶつぶつとふくらんで  
光り出すに都合のいい釜や  
劫初からうけつがれた火のぼて  
りの前には  
母や、祖母や、またその母たちが  
いつも居た。

その人たちは  
どれほど愛や誠実の分量を  
これらの器物にそそぎ入れたこと  
だろう、

それはたゆみないいつくしみ  
無意識なまでに日常化した奉仕の姿。

炊事が奇しくも分けられた  
女の役目であったのは  
不幸なことは思われない、  
そのために知識や、世間での地位が  
たちおくれたとしても  
おそくはない  
私たちの前にあるのは  
鍋とお金と、燃える火と

それらなつかしい器物の前で  
お芋や、肉を料理するように  
深い思いをこめて  
政治や経済や、文学も勉強しよう。

それはわごりや采達のためでなく  
全部が  
人間のために供せられるように  
全部が愛情の対象あつて励むように。

**石垣りん**（詩人）

『石垣りん詩集 私の前にある鍋とお金と燃える火と』  
(童話屋、2000年)より



■ 大越 愛子  
井桁 碧 編著  
■ 青弓社  
■ 2005年 初版  
■ 2800円(税別)



## 戦後・暴力・ジェンダー1 戦後思想のポリティクス

本書は、「戦後・暴力・ジェンダー」全三巻の1として刊行されたものである。アメリカがイラク全土を占領したとき、占領による民主化が成功した例として日本を誇らしげに挙げたことは記憶に新しい。

戦後60年を経て、果してアメリカの軍事占領が日本に「民主主義」をもたらしたか、は検討に値する重大な課題である。

本書は日本の戦後の思想・言説を、「女性国際戦犯法廷」以後のジェンダーの視点から歴史化する試みとして編まれた。第一部「戦後とは何か」で、占領、沖縄、リブ、女性学などから分析し、第二部「戦後思想を外部の視点で捉える」では、東アジアとの連関のなかで考え、最後の日韓4人の議論で「アジアの今後と連帯の可能性」を探っている。

「戦後論の多くにジェンダー視点が皆無か希薄」であり、あつたとしても「せいぜい『女たちの戦後』として『女』をゲット一化する」という指摘は、女性史を専門とする筆者にとっては鋭く痛い。一国女性史にとどまらず、セクシズム、レイシズム、

コロニализムの問題をきちんと含んだ戦後史の構築が、今後の課題となって迫る書である。

### 家父長制デモクラシー

アメリカ軍による占領から始まる日本の戦後は、帝國主義日本の解体、象徴天皇制への転換、家制度の解体による女性の「解放」をもたらした。国連憲章を見るように、人権の保障は第2次大戦後の世界通念であったにもかかわらず、アメリカ主導による日本の民主化という神話を生んだ。それは「上からの民主化」であり、「家父長制デモクラシー」といえるものである。家父長的リーダーとなったマッカーサーと、彼に守られて象徴となった天皇は、日本の戦後の欺瞞の存在であり、女性の「解放」はデモクラティックな装いの性別役割分業に取って代わられた。

おりいみやこ  
折井 美耶子（女性史研究者）

## アジアの開発と貧困 —可能性、女性のエンパワーメントとQOL

グローバリゼーションにおける技術やサービスの進展により、私たちの生活はますます便利になり、さまざまなサービスにつでもアクセスし、瞬時に欲求を満たせる社会になった。しかしこの恩恵は地球上の人々に平等に行き届いておらず、むしろ世界の貧富の差は拡大しているといふ。

本書はアジアにおける開発と貧困について「バンガラディュの貧困と女性の開発」「韓国における女性非正規雇用の実態と問題点」「中国農村地域におけるNGOの開発活動—貧困削減と教育援助」等、山口大学大学院東アジア研究科の研究に基づき、興味深い切り口から紹介している。

本書を通して語られているのは、アマティア・センの「開発の究極の目的は、人々の選択肢の拡大、つまり自由の拡大」であり、可能性(capability)拡大のプロセスであるという主張である。さらに、開発は経済発展のみで表されるものではなく、より幅広い社会の仕組み、文化、政治、制度的概念をも含むものだといふ。

このように捉えるとき、開発とは日本のような「豊かな」国が、

「貧しい」国の人々に対して行うものではなく、あらゆる国、人種／民族、ジェンダー、階級の人間が主体となるもの、さらには人として生きることそのものであると理解できるのではないかだろうか。ジェンダーと開発についての具体的な指標や考察材料を提供してくれる一冊である。

### ケイパビリティ(可能性)

センによると、ケイパビリティ(可能性:著者 松井氏訳)とは、個人が兼ね備えた、個人が価値を置くことを実践していくための、総合的な生きる力のことである。また慢性的な貧困とは経済的、政治的、社会的にケイパビリティが剥奪されている状態だとセンはいう。生きている環境や個人により価値観は異なるため、共通尺度でケイパビリティを測ることはできない。しかし、開発は単に経済問題としてではなく、ケイパビリティという観点から捉えられるべきであるという「ケイパビリティ・アプローチ」は、国連の人間開発や社会開発の枠組みに取り入れられている。

おきやはなおみ  
沖山 尚美（フィリピン大学社会福祉と地域開発学部女性と開発学科修士課程）



■ 松井 範博  
池本 幸生 編著  
■ 明石書店  
■ 2006年 初版  
■ 3800円(税別)



## 京都橘大学女性歴史文化研究所叢書 〈悪女〉の文化誌

京都橘大学女性歴史文化研究所における学部横断的な研究活動の一環として、「文学に見る『悪女』觀の形成」というテーマの共同研究の成果として上梓された本研究書は、洋の東西、時代を問わず、またジャンルを超えて〈悪女〉を蘇らせ、家父長制社会の中で女性というジェンダーであるが故に〈悪女〉に貶められた彼女たちに仕掛けられたトリックを暴いていく。「悪」の意味の大転換を図ることで、既成概念を疑い眞の意味を問うことの重要さを示唆してくれる恰好の啓蒙書。

収録論文は以下の9編。〈悪女〉に仕立て上げられた『今昔物語集』の本院侍従の実像に迫る鈴木論文、中世における〈悪女〉という用語の誕生から、その意味の変遷を辿る田端論文、江戸歌舞伎における「悪婆」の誕生、発展、完成の経緯を論じる林論文、前近代の中国的倫理規範を見つづ、その反転した姿としての〈悪女〉像を探る蒲論文、尾崎紅葉の「金色夜叉」を宮の立身出世物語と見、彼女の「新しさ」を読み取る野村論文、戦前の家父長制下の「ささやかな悪女」を描いた山本禾太郎の探偵小説を論じる細川論文、遠藤周作の「深い河」の「求道的な悪女」美津子が母なるチャーム

ンダーとして再生する可能性を探る辻本論文、三枝和子のギリシア神話の研究を踏まえ、〈悪女〉が生まれるからくりを小気味よく論じる鎌田論文、ヨーロッパで抹殺されてきた「魔女」をプラスイメージで蘇らせたとしてD·H·ロレンズを再評価する杉山論文。いずれも個性豊かな論文揃い。

### 悪女

日本の南北朝期には「醜い女」の意味で使用されていたが、戦国期以後、女性に対してのみ真摯が強いるようになると「身持ちの悪さ」が〈悪女〉のレッテルとして貼られるようになった。一方、西洋には〈悪女〉に近いものとしてwitch(魔女)やfemme-fatale(fatal female) (男性の運命を変える危険で魅力的な女性)などの言葉がある。〈悪女〉はこのように多かれ少なかれ男性に都合の悪い影響を与える存在に付される名称であるが、本書の論者たちはそのような従来の既成概念を根底から覆し、〈悪女〉を「無意識の内にすり込まれたモラルに違和感を感じた鋭敏な神経の持ち主」、あるいは「迫害を顧みず、自分の生き方を貫いた勇気ある先駆者」と捉えている。

たべいよしこ  
田部井 世志子（北九州市立大学教授）



■ 鈴木 紀子  
林 久美子  
野村 幸一郎 編著  
■ 晃洋書房  
■ 2005年 初版  
■ 2200円(税別)





## ムーブ叢書 ジェンダー白書4 —女性と少子化

少子化抑制を目指している政府の少子化対策は、子育て支援に止まらず、働き方の改革にまで及んでいる。これは男女の固定的な性別役割分業に基づく働き方こそが、少子化的根源だという認識に立っているからだ。

本書の総論も、働き方の改善が「長期的には、ほとんど唯一の有効な少子化対策」と見ている。しかし本書には、この考え方とは明らかに違う論文が三本ある。それらを要約して言えば、少子・高齢社会を肯定的に受け止めて、その社会を男女共同社会や差別のない共同参画の社会に作り変える少子化適応策である。評者はこの後者の立場に与したい。

後者の見地に立つ三つの論文の中でも、本書最後の論文「少子化と男女共同参画センターの役割」は、他の論文と違った論点を提示していて、大変刺激的である。それは「格差社会」をつくりだすだけのネオリベラリズムとの対抗なしには、男女共同参画社会の形成はあり得ないということである。これには大いに賛成だ。しかし残念ながら、この論文ではネオ

リベラリズムに対抗しうる経済政策は提示されていない。今後の研究に待つこととしよう。

最後に一言。力作揃いの本書だが、中にはもう少し平易に書いてもらいたいものもあった。

### ネオリベラリズム(新自由主義)

新自由主義は小さな政府、市場原理を重視する経済思想。これは第二次大戦後から1970年代まで先進諸国の経済政策を導いてきたケインズ理論による総需要管理など国家介入による経済運営が70年代行き詰った後、保守政権の経済政策理論となった。それは政府の機能を縮小して民間企業に移し、民間企業の自由競争によって経済の活性化をはかるというものだが、市場は弱肉の世界、弱者と強者の二極分解を進め、格差拡大や安全無視の社会をつくるのは必然。このことは英米では既に実証され、日本の小泉「構造改革」政策も目下実証中。

たなか しんいちろう  
田中 慎一郎 (北九州市立大学名誉教授)



- 岩中 弘暢 江原由美子 落合恵美子 他著
- 北九州市立男女共同参画センター「ムーブ」編
- 明石書店
- 2006年 初版
- 3600円(税別)

## 明石ライブラリー93 諸刃の援助

本書は暴力を作り紛争状況において、人びとが紛争解決に向かう助けとなるような援助をするにはどうしたらよいか、という困難な課題を取り扱っている。武装グループの庇護の下で、紛争状況にある人びとに対する援助活動を行うことを余儀なくされたり、援助が紛争の一方のグループを利してしまうことは珍しくない。

本書は、援助従事者が、このように一方に加担することなく、平和を作り出すための支援となるような援助を行うための教訓を、世界各地の経験から導き出している。その教訓は戦争についての理解から平和へと向かわせるモノの例示まで幅広く、多様である。特に、平和を作り出す取り組み事例が数多く示されており、実践的に参考になるとともに、例え絶望的に見えるような戦争状態にあっても、現地に平和を作り出す力があるのだということを改めて実感させられる。「普通の人たちは戦争なんかしたくないんです。でも政策決定者が戦争を起こすんです」という言葉に同感するとともに、現地の人びとの思いを引き出す援助の重要性に改めて思いを致し



- メアリー・B・アンダーソン 著
- 大平剛 訳
- 明石書店
- 2006年 初版
- 2900円(税別)



## 自由と保障 —ベーシック・インカム論争

ベーシック・インカム(BI)とは、年齢、性別、社会的な地位、経済的な状況にかかわらず、市民権に基づく個人の権利として市民が無条件かつ定期的に受け取る所得を言う。18世紀末に登場して以降、社会政策構想として少なからぬ関心を集めてきた。一方、その無条件性ゆえにBIは「財政を破壊し、本当に必要な人には十分ではなく、また働かない怠け者(フリーライダー)を生み出す」との批判され、実現を疑問視する者も多い。

とはいっても、すべてを自己責任に帰す極端な立場を除けば、非自発的失業や貧困、またアンペイドワークの存在など市場の欠陥を補うシステムの設置に反対する者はない。実際、これまで立場の違いはあれ、現行の社会保障制度に置き換わる、あるいは補完するBI的な制度の提案や部分的実施(児童手当などはこれに当たる)がなされてきた。

本書は、そのうち急進右派、福祉集合主義、社会主義、フェミニズム、エコロジズムの立場を取り上げ、その社会保障・BI観を検証する(たとえば前二者によるBI的提案や現行の社会給付は資力調査(ミーンズテスト)を前提とすることでかえて貧困を固定化してしまうなどの問題が指摘されている)。

## —紛争地での援助の二面性

た。本書は訳が非常にこなれており読みやすく、また本の題名の訳もぴったりである。

### 赤十字国際委員会

(International Committee of the Red Cross: ICRC)

スイスの実業家アンリ・デュナンが提唱し、1863年に結成された、戦争・内戦の犠牲者の保護と救済を行う国際NGO。これに対して、各国の赤十字社・赤新月社の国際的連合である国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)(1919年設立)は、災害被災者の救援を行っている。両団体とも戦時下における傷病者の人道的扱いを定めたジュネーブ条約を柱とする国際人道法を普及・促進している。赤新月社はイスラム教の国で用いられている。本書ではブルンジにおけるICRCの国際人道法普及活動が事例として取り上げられている。

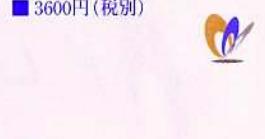
おだ ゆきこ 織田由紀子 (日本赤十字九州国際看護大学教授)



### 市民権

BIは市民権に基づく権利であるため、市民権の定義はBIのあり方の根本を決定する。一般には、「人権」と同義、あるいは「市民としての行動・思想・財産の自由が保障され、居住する土地や国家の政治に参加することのできる権利」(広辞苑)とされるが、グローバル化が進む今日、国民国家の枠にとらわれない(さらにはジェンダーや環境をも視野に入れた)再定義が求められている。本書では問題の単純化のため、市民権を「法的な居住資格」と定義している。

- トニー・フィツ・トリック 著
- 武川 正吾 菊地 英明 訳
- 効草書房
- 2005年 初版
- 3600円(税別)



こばやし ようすけ  
小林洋幸 (フリーランス編集者)



## 統計・白書最前線

### データが語る「男女共同参画」の“今”



- 「暮らしと社会」シリーズ  
男女共同参画白書  
(平成18年版)
- 内閣府男女共同参画局 編
- 独立行政法人 国立印刷局
- 2006年6月22日 発行

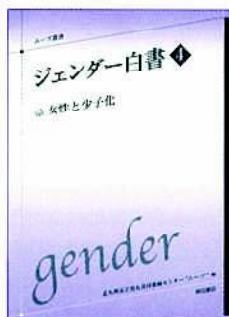


- 男女共同参画  
統計データブック 2006  
—日本の女性と男性
- 独立行政法人  
国立女性教育会館・  
伊藤陽一 編
- 株式会社ぎょうせい
- 2006年3月24日 発行

いま、国レベルで、自治体で、そして地球規模で、さまざまな角度から性別データが出され、白書や報告書として発行されています。2005年版『人間開発報告書』によると、日本のGEM(ジェンダー・エンパワーメント指数)は世界で43位です。2004年は38位でした。果たして、「男女共同参画」はどこまで進んだのでしょうか?



- 女性労働の分析 2005年  
—中高年女性の就業実態と意識
- 厚生労働省  
雇用均等・児童家庭局 編
- 財団法人 21世紀職業財団
- 2006年6月20日 発行



- ムーブ叢書  
ジェンダー白書 4  
—女性と少子化
- 北九州市立男女共同参画センター“ムーブ” 編
- 明石書店
- 2006年3月27日 発行
- ※中面の書評参照



- 「暮らしと社会」シリーズ  
高齢社会白書  
(平成18年版)
- 内閣府 編
- 株式会社ぎょうせい
- 2006年6月5日 発行



- 環境白書  
(平成18年版)
- 環境省 編
- 株式会社ぎょうせい
- 2006年5月31日 発行



- 科学技術白書  
未来社会に向けた挑戦  
—少子高齢社会における科学技術の役割  
(平成18年版)
- 文部科学省 編
- 独立行政法人 国立印刷局
- 2006年6月2日 発行



- Human Development Report 2005  
International Cooperation at a Crossroads:  
Aid, Trade and Security in an Unequal World
- The United Nations Development Programme
- Charlotte Denny
- 2005

このページの白書関係は、“ムーブ”に配架しています。



### 第4回 ジェンダーの視点で読む 読書感想文コンクール!!

- 募集期間：平成18年6月20日(火)～平成18年10月20日(金)  
 対象：全国の小学生・中学生  
 賞金：最優秀賞(3部門から各1編) 1編につき2万円分の図書券と記念品  
 優秀賞(3部門から各1編) 1編につき1万円分の図書券と記念品  
 佳作(若干数) 1編につき5千円分の図書券と記念品  
 協力校賞(若干数) 各校に記念品



詳細は、  
北九州市立  
男女共同参画センター“ムーブ”  
読書感想文コンクール係へ  
TEL. 093-583-5082  
[http://www.kix.or.jp/move\\_we/](http://www.kix.or.jp/move_we/)



北九州市立  
男女共同参画センター

**ムーブ**

〒803-0814 北九州市小倉北区大手町11-4  
 Tel: 093-583-3939 Fax: 093-583-5107  
 ホームページ [http://www.kix.or.jp/move\\_we](http://www.kix.or.jp/move_we)  
 E-Mail [move@move-kitakyu.jp](mailto:move@move-kitakyu.jp)

### Cutting-Edge 第23号

- 【編集・発行】 発行日 2006年7月20日  
 発行者 羽瀬川順子  
 編集協力 女性学・ジェンダー研究ネットワーク  
 編集 力武由美  
 発行 北九州市立男女共同参画センター “ムーブ”  
 印刷 (株)エディックス

※本誌は再生紙を利用しています。